ハイデッガーにおける真理論とサルトルによるその継承

—教育実践における真理開示の捉え直しに向けて—

教育創発学コース　遠　藤　野ゆり

Heideggers Lehre von der Wahrheit und ihr Nachfolge bei Sartre
Zur neuen Überlegung der Erschlossenheit von der Wahrheit bei schulischer Praxis

Noyuri ENDO

Gewöhnlich halten wir die Wahrheit für die Übereinstimmung der Erkenntnis mit der Sache. Aber Heidegger, der das Höhlengleichnis von Plato auslegt, zeigt, dass man unter dem Wort Wahrheit philologisch Unverborgenheit verstehen soll. Und Sartre folgt nach Heideggers Lehre von der Wahrheit als Unverborgenheit nach und entwickelt sie aus seinem eigenen Gesichtspunkt. Anhand Heideggers Lehre, die die Passivität in der Erschlossenheit der Wahrheit nachdrücklich betont, und auch anhand Sartres Lehre, die die Aktivität dagegen nachdrücklich betont, kann man die Erfahrungen von Kindern und Lehrern neuerlich überlegen, mittel derer das Seiende als Wahrheit ihm beiden erscheint.

目　　次

はじめに
Ⅰ　ハイデッガーにおける真理
　A　認識と事柄の一致としての真理と非隠蔽性としての真理
　B　開いていることと真理
　C　非真理において隠蔽された存在者
Ⅱ　サルトルにおける真理
　A　存在の暴露としての真理と非真理
　B　真理の検証
　C　真理と他者
　D　リスクとしての真理
　E　真理開示における責任
おわりに

はじめに

通常我々は，真理という言葉で表される事態を，次のように捉えている。例えば遠くの対象を人間と知覚し，近づくと確かに人間であった場合，当初の知覚は正しかった，とみなされる。このように，対象を人間とみなす認識が，その対象は実際に人間であるという事態そのものと合致する時に，当の認識は真である，と我々は判断する。

しかしながら，認識と事態の一致，という従来の真理観に即すのみでは，現実の教育場面における教師や子どもにとっての真理の体験を十分には捉えられない場合がある。例えば，三角形の内角の和が180度であるという事態を学習する子どもたちは，いくつかの三角形の内角を実際に足すことによって，あらゆる三角形に関してこの事態が成り立つことを実感を伴って発見する場合もあれば，そうした実感を抱くことなくこの事態を応用することだけをできるようになる場合もある。子どもたちは，いずれの場合にも三角形に関する同じ事態にいわば「正しい」仕方で関わっているにもかかわらず，この事態を全く異なる仕方で体験しているはずである。すなわち，前者の場合では，いくつかの三角形にこの事態が実際に当てはまることを確認することによって，事態は確かにそうなっているのだ，ということが，子どもたちには，時には驚きをもって実感されることになる。他方，後者の場合では，応用の仕方が事態と一致するかどうかが問題となり，事態

は確かにそうなっているという実感や驚きはおそらく伴われないであろう。にもかかわらず，我々の従来の真理観に即せば，両者の場合の子どもたちの体験のされ方の差異は捉えられなくなってしまう。あるいは，教師は立場上，子どもたちに伝達する事柄の正しさを，伝達する前から既に知っている。したがって，従来の真理観によってでは，教師がいかなる仕方で伝達しようとも，教師は真理を伝達している，と一様に捉えられることになってしまう。その結果，例えば教師が，授業において，何らかの事態そのものの奥行きの深さといったものを，子どもたちと共に再発見するとしても，そうした体験は捉えられないままに留まってしまう。

認識と事態の一致という真理観に即すことによってでは捉えきれない，以上で述べたような教師や子どもにとっての真理の経験を，いわゆる達成感や満足感といった感情からではなく，真理そのものの観点から捉えることを可能にしてくれるのが，本稿で考察することになる，ハイデッガーとサルトルの真理論である。ハイデッガーは，古代ギリシャにおける真理観に関する彼に独自の文献学的考察を通して，従来の真理観とは全く異なった真理観を打ち出している。ハイデッガーの真理観に強く影響されたサルトルも，その真理観を継承しつつ，新たな真理論を展開している。両者の真理観は，既に素描したことからすれば，教育の場面における子どもたちや教師の真理の体験を明らかにするうえでの重要な手がかりとなるはずである。

Ⅰ ハイデッガーにおける真理

A 認識と事柄の一致としての真理と非隠蔽性としての真理

自明のことであるが，捏造されたものや想像されたものは，通常，真の存在者とは呼ばれない。目の前の人間が真の存在者として捉えられるのは，私がこの人間を知覚しようとしまいと，当の人間が，依然としてそこに存在しているからである。遠くにある対象を人間と捉えたが，実はそれは人形であった，というような事態において，私の知覚は実際の事柄と一致していないのであるから，私の知覚は真理ではなかった，と我々はみなす。

我々のこうした素朴な真理観は，ハイデッガーによれば，「真理は，物事と知性との一致である(veritas est adaequatio rei et intellectus)」(WW, S.7)[1]，という哲学史上伝統的に真理として規定されてきたことに准じている，とされる。他方で，ハイデッガー自身は，真理という言葉の起源を古代ギリシャにまで遡って明らかにする。その際に，プラトンの洞窟の比喩を用いつつ，この比喩にハイデッガー独自の解釈を付すことによって，真理という言葉の当時の意味を明らかにしている。

よく知られているように，プラトンの洞窟の比喩において，囚人たちは，縛めとして，生まれた時から洞窟内で手足や首を縛られており，首の向きを前方に固定されている。彼らには，自分のはるか上方の火によって自分の前方へと映し出された諸事物の影を見ることしかできない。囚人たちは，事物そのものを見ることが全くできないために，影を真の存在者とみなさざるをえない。しかし，彼らが縛めを解かれて後ろを振り返り，それまで自分が見ていた影を生み出していたところの火のもとで，事物そのものを見るならば，彼らは初めて，影の源である事物の存在を知らされる。この時には，これまでは隠され蔽われていたものが，より蔽われなきものとして現われてくるのである。さらには，囚人たちが洞窟の外へ連れ出され，太陽の光のもとで世界内の諸事物を見るならば，それらの事物は，最も蔽われなきものとして囚人たちに現われてくることになる。

ハイデッガーは，このように，それまではその存在そのものが蔽われていたものが，光に照らされて自己を開いて指し示し，蔽われなきものとして現われてくる時の，「この開けたもの」こそ真理である(WW, S.16)，という。そして，この開けたものを，西洋哲学の創成期である古代ギリシャにおいては，「アレーテイア(αλήθεια)…と捉えていた」(WW, S.16)ことを文献学的に明らかにする。ハイデッガーによれば，アレーテイアという語は，「剥奪のαprivatum(α-λήθεια)によって特徴づけられている」(PW, S.32)。すなわち，真理は，現代において我々が通常用いている認識と事態との一致という意味での真理とは異なり，古代ギリシャにおいては，「隠蔽されている状態から戦い取られたもの(das einer Verborgenheit Abgerungene)を意味している」(PW, S.32)，とされる。ハイデッガーは，このように，存在者の在りようが隠蔽されている状態から，その蔽いが奪い取られ，隠蔽されていない状態へともたらされることこそ，本来の意味での真理である，とみなす。したがって，αλήθειαという古代ギリシャ語の本来の意味は，通常ドイツ語に訳されている「真理(Wahrheit)」ではなく，「非隠蔽性(Unverborgenheit)」という語で適切に表される(WW, S.16)ことになる[2]。

ハイデッガーのこうした真理観に即せば，囚人たちは，縛めを解かれ洞窟内で解放され，上方の火に照らされている諸事物を知覚できるようになることにより，「より非隠蔽的(αληθέστερα)であるものの圏内に入り込む」(PW, S.28)ことになる。ハイデッガーは，しかし，この時にいまだ洞窟の中にある囚人たちには，事物の存在を十分には捉えられないことを指摘する。なぜならば，プラトンの洞窟の比喩において，揺らめく火のもとで捉えられる諸事物の現われは，いまだいくらか蔽い隠されているからである。さらに囚人たちは，洞窟の外に出て，太陽に照らされている事物を見る。四季折々を移り行かせ，世界内の一切を管轄する太陽に照らし出されることによって，この時には事物は隅々まで現われ，囚人たちは，「最も非隠蔽的なもの」(PW, S.29)の圏内に到達することになる。

洞窟の比喩についてのハイデッガーのこうした考察から明らかとなるように，非隠蔽性は，蔽い隠されていない程度に関して漸次的段階を備えていることになる。存在者の影しか現われてこなかった事態よりも，揺らめく火のもとで存在者がより非隠蔽的に現われてくる事態の方が，さらには，太陽のもとで存在者が最も非隠蔽的に現われてくる事態の方が，より真理と呼ばれるべき事態なのである。したがって，本来の意味での真理は，「存在者を〔あるがままに〕存在-せしめること(das Sein-lassen des Seienden)」(WW, S.15, 〔 〕内引用者，以下同様)である，といえる。

ハイデッガーにおける以上の真理観に即すならば，教育の具体的場面において，新たな学習内容に初めて触れる際の子どもたちの体験は，真理の観点から改めて捉えられることになる。例えば本稿冒頭で述べた，三角形の内角の和は180度であるという事態を初めて発見する子どもにとっては，あらゆる三角形の内角の和が備えているこの事態は，自分がそれを発見する以前には，確かに成立していたにもかかわらず，自分には蔽われていたことになる。しかし，実際にいくつかの三角形について，その内角を足してみることにより，どのような三角形においてもこの事態の確かに成立することが突然捉えられた時に，子ども自身にとって，この事態は蔽いを剥ぎ取られ，蔽われなきものとして現われてくる。この時には，その子どもは，当該の真理をまさに実感している，といえるのである。

B　開いていることと真理

では，隠れなきものと出会いうる時に，人間はいかなる在り方となっているのであろうか。このことを，或る存在や自分の可能性に対して開かれているという観点から人間を現存在と呼ぶハイデッガーの考えに即して，考察したい。

ハイデッガーによれば，現存在は，「単に脱自的に存する(ek-sistieren〔＝実-存する〕)のみならず，同時に執自的に存する(in-sistieren〔＝固-執する〕)」(WW, S.23)，とされる。執自している現存在の在りようは，先に述べた洞窟の比喩における，隠蔽されていたものが蔽いを取られる瞬間に生じる事態についてのハイデッガーの考察によって，明らかにされる。先に考察したように，影しか見ることのできない囚人たちは，影こそ真の存在者である，とみなすしかない。また，縛めを解かれ，火に照らされた事物を振り返り見たとしても，それまで暗がりの中にいた囚人たちにとっては，目がいまだ光に慣れていないために，眩しさのあまり幻惑が生じ，本来の事物を見定めることができない。それどころか，火そのものを見つめるよう強制されたならば，彼らは，暗がりへと逃げ込みたくなってしまうであろう。すなわち，ハイデッガーの言葉で述べれば，囚人たちは，「自己自身の確保に固守する」(WW, S.23)ことを試みざるをえなくなるのである。こうした時には，ハイデッガーが記述するように，「この幻惑は，火そのものを見ることを，また，その光が事物をいかにして照らし，その結果，初めて事物を現出せしめるということを見て取る(vernehmen)のを…妨げる」(PW, S.28)のである。

洞窟の比喩に即した以上の考察から明らかとなるように，執自している現存在は，自分のこれまでの在り方や見方に固執してしまう。それゆえ，執自している現存在には，「存在者を存在せしめることにおいて，存在者を，実は，それがあるところの，そしてそれがそうであるような存在者で在らしめることが…できない」(WW, S.18)。執自している現存在は，「存在者が…蔽い隠され，偽装される」(WW, S.18)ようにしてしまうのである。

他方で，脱自している現存在は，光の明るさに目が慣らされ，存在の現われそのものを捉えられる状態にある，といえる。こうした時に，現存在は，「自己を展開し，存在者を前にして身を引く」(WW, S.16)ことになる。すなわち，存在者が蔽われなきものとして現われるために，現存在は，自分自身の見方に固執するのをやめ，自分がそれまでもっていた理念や考え方の主体としての自己を退去させ，存在者が現われてくる場をいわば開いて待っていることになる。このように，

存在者の現われへと「態度の開いていること」(WW, S. 12)によって初めて，あるがままの存在者は現存在に対し蔽われることなく現われることが可能となるのである。

こうした真理観に基づいて，ハイデッガーは，「真理の本質は自由(Freiheit)である」(WW, S.13)，と述べる。この自由は，通常我々がこの言葉を用いる時とは異なり，自分自身へと縛られ固執することなく，自らの態度を開くことによって，存在をあるがままに現われせしめる，という意味で用いられている。しかも，現存在は，「存在者を存在せしめることにおいて〔その存在者と共に〕揺れ動き，あれこれの存在者にそのつど応じて自ら態度をとる」(WW, S.19)。すなわち，現存在は，存在者があるがままに現われ真理が開示されるそのつど，その現われ方に応じて自らを揺り動かされ，自分の捉え方を存在者の現われ方に受動的に合わせ同調させるという仕方で，存在者の現われに「同調させられていることとの関係に入り込む」(WW, S.19)。現存在は，自分のもっている理念や考えに基づいて存在者を捉えるのではなく，存在者の現われそのものへといわば身を曝し委ねることによって，その存在者の現われへと自らを合わせていくことになるのである。こうした記述から明らかとなるように，ハイデッガーにおいては，真理の開示に際し，その主体たる現存在が能動的な在り方となることは，ほんのわずかにも許されていない。

この時，現存在には，「全体としての存在者に脱自的に身を曝していること(Aussetzung)が『体験され』『感じられ』うる」(WW, S.19)，という仕方で真理が開示されることになる。真理は，強い驚きや感情といった実感を伴って初めて，真理として開示されていることになる。或る存在者の現われへと現存在が受動的に態度を開き，「存在者の開現されていること(Entborgenheit〔＝隠蔽を脱すること〕)へと身を曝すこと」(WW, S.16)を介して，初めて，真理は体験されうるのである。

C 非真理において隠蔽された存在者

ハイデッガーのこうした考察は，自らの現を開いている現存在が，その開きゆえに，真理の開示によって大きな驚きないしは受難(Pathos)を蒙らざるをえないことを明らかにしている。例えば，ギリシャ悲劇『エディプス王』において，知力に優れていたエディプスは，スフィンクスから出された謎を難なく解き明かすにもかかわらず，自分が父を殺し母を妻としたという真実を知らされた時には，大きな驚きを蒙り深い苦悩に陥る。この時には，エディプス自身にとってエディプスという存在者が開現している，といえる。エディプス王のこうした驚きに典型的となるように，それまで隠蔽されていた事態が，いわば新たな光によって全く異なった姿で現われてくることに驚かされ，打たれる時に初めて，真理はその者にとって開示された，といえることになる。

確かに，教育実践において，例えば三角形の内角の和の真理を発見する際の子どもたちの多くは，エディプスほどの驚きを蒙らないであろう。したがって，ハイデッガーにおける真理の開示と，授業における子どもたちにとっての真理の開示との間には，大きな隔たりがあることは否定できない。しかし認識と事態の一致という意味での真理観によっては捉えられない子どもたちの真理体験に関しては，エディプスの場合と本質的には共通点を備えていることも確かであろう。それどころか，非隠蔽的な現われによってもはや驚かされ感動させられることがなくなってしまえば，開示された存在は，「今となってはただ眼前に見出されるだけであり，すなわち，既存のもの(Befund)でしかなくなる」(EM, S.67)，という点でも，両者の真理開示は共通している。こうした時，開示されたものは，容易に処理しえる単なる対象となってしまうのであり，もはや真理ではなくなってしまう。というのも，たとえ三角形の内角の和の真理を発見し魅せられたとしても，一旦，その真理を例えば応用問題のための道具として使えるようになってしまえば，子どもたちは，この真理の現われへと自己を受動的に同調させる在り方となっていないからであり，したがってもはや真理は開示されていないからである。こうしたことからすれば，ハイデッガーのいう意味での真理の開示は，態度を開いている現存在が驚かされているまさにその時にしか生じえないこととなり，実際には，非常に稀有な体験とならざるをえない。

真理開示の受動性を強調するハイデッガーによれば，或る存在者を真の存在者として捉えるためには，「存在する者としての存在者の開現することの中へと，〔自己を〕関わらせて放下していること(Eingelassenheit)」(WW, S.16)，という在り方になる必要がある，とされる。我々は，そのあるがままの姿を自らに開示してくれる存在者へと自己を開き，ただ受動的な在りようとなって，何ものにも囚われることなく落ち着いていること(Gelassenheit)という在り方で，当の存在者へ

と自己を曝しているのでなければならない。例えば，文学教材の学習の最後に，朗読に聴き入っている子どもたちは，まさに教材の世界へと自己を開いて，文学教材に描かれている出来事の現われへと自己を曝している，といえる。

しかし，こうした仕方で，物事が隠れなき状態で現われることを受け止める，といった脱自的な在り方が，我々にとって常に可能ではないことは，経験的にも明らかである。授業においても，新たな発見に驚かされたり，朗読に聴き入っている，といった子どもの在り方が常に生じているわけではない。したがって，我々は多くの場合，自己の現を閉じてしまっており，存在者の現われは隠蔽された状態に留まっている，といえる。

しかしながら，ここで見逃されてはならないことは，隠蔽されていることは，確かに非真理であるとはいえ，「真理と非真理は本質において相互に無関係(gleichgültig)ではなく，むしろ共属し合っている」(WW, S.18)，とハイデッガーがみなしていることである。というのも，真理を事象と知性の一致とみなすのを拒むイデッガーにおいては，非真理も事象と知性の不一致すなわち虚偽と捉えられるのではなく，蔽われているという意味での非真理は，そもそも，隠蔽されている，という在り方において，蔽われなさを前提としているからである。そしてこのことこそ，本来子どもたちは，隠蔽されているがいつでもその蔽いを取り外されうるという現われに対応した豊かさを，すなわち，真理を体験しうるという豊かさを常に携えているはずであることを暗示し，教育の可能性を示してくれる。

ただし，ハイデッガーの真理観に即せば，真理開示はめったに生じえないものとなる。したがって，子どもたちや教師の日常的な多くの体験が，ハイデッガーのいう意味での真理開示にいたることはほとんどないはずである。他方，日常的な出来事における真理開示について，ハイデッガーと同様の真理論を展開しているのが，サルトルである。

Ⅱ　サルトルにおける真理

A　存在の暴露としての真理と非真理

サルトルもまた，ハイデッガーと同様，認識と事象の一致を真理とする従来の真理観を否定し，「真理の本質は，《〔なんらかの〕存在がある(il y a de l'être)》における，《ある(il y a)》のことである」(VE, p.19)，とする。すなわち，存在者があるがままに現われることこそ真理の開示である，とサルトルも考える。例えばサルトルは，真理開示の例として，ビロードの手触りが柔らかい，という事態を挙げる。ビロードの手触りが真に柔らかいか否かは，実際にそのビロードに触れることによって明らかにされる。そして，ビロードのつやつやとした柔らかな手触りが実際に触れられて明らかにされることこそ，ビロードの存在が開示されることである，とサルトルはみなすのである。

サルトルはまた，「真理とは存在の段階的な(progressif)暴露のことである」(VE, p.19)，と述べ，何らかの存在者が存在していることの内実が，人間にとって徐々に知られることこそ真理である，とする。真理は存在の暴露である，というサルトルの表現は，ハイデッガーにおける非隠蔽性という言葉と同様の，次のような側面を備えている。すなわち，「暴露(dévoilement)は，暴露されたものが，根源的には隠蔽されていた(voilé)ということを暗に含んでいる」(VE, p.35)のである[3]。したがって，サルトルにおいてもやはり，暴露されるものは，暴露される以前にも，蔽いをかけられた状態でそこにある，ということになる。ビロードは，手で触れられる以前からその柔らかさを備えており，実際に触れるという行為によって，その手触りを蔽っていたヴェール(voile)が外され，その存在が暴露される，というのである。したがって，当然のことながら，暴露されてその存在が露わになる以前には，真理は，いまだ真理となっていない非真理として存在しているのであり，ハイデッガーにおいてと同様，「真理は，まず何よりも，存在へと到来することになる非真理である」(VE, p.120)，という捉え方がサルトルにおいてもなされることになる。

例えば実際にビロードに触れることによって我々はその存在を暴露する，とサルトルが述べることに典型的となるように，真理の開示は，サルトルにおいては，行為や行動によってなされることになる。それどころか，サルトルは，「あらゆる行動は…知的であれ，実践的であれ，あるいは感情的であれ，存在を暴露し，真理を現わしめる」(VE, p.44)，と述べ，我々のあらゆる行動が真理開示となっている，と主張する。

ハイデッガーと同様，存在そのものの現われを真理とみなしながらも，サルトルにおいては，真理は，「具体的現実」(VE, p.25)とされる。ただし，サルトルにおいては，あらゆる行動を真理開示とみなすがゆえに，ビロードの手触りといった非常に卑近な例が，真理開示として挙げられることになる。他にもサルトル

は，白い粉末は塩であるとか，テーブルは円い，といった事態を真理開示の例として挙げる。サルトルのこうした例示に従えば，あらゆる行為が真理を開示することになり，したがって，真理開示ではあらぬ事態というものがほとんど想定されえなくなってしまうであろう。そうであるならば，こうしたサルトルの真理観は，誤りでないとしても，ほとんど何の解明をもなしていないも同然となってしまい，ハイデッガーの真理観を継承しているといういわゆる哲学史上の意味しかもたないことになる。ただし，他者関係の観点からサルトルのこうした真理観を捉えれば，この真理論は，サルトル自身が示すあまりに卑近な例を越えて，例えば教育実践における子どもへの教師の真理開示の内実を捉えるうえで，大きな示唆を与えてくれることになるのである。

B 真理の検証

以上で考察した，具体的行動による存在の暴露において重要なのは，存在者が，私の身体にとって現われてくる，ということである。例えばビロードに触れることにより，「私はこのビロードを，〔この私の〕肉体に対して存在させる」ことになる(VE, p.27)。したがって，真理開示には体感が伴うのであり，自らの身体でもって存在を具体的に体感しつつ開示することこそ存在の暴露であり真理である，とサルトルはみなす。しかし，真理の体感の内実を，自分の身体を介したあらゆる行為に伴う実感にまで拡張するがゆえに，サルトルは，やはり，上述したように，真理の厳密な価値と意味とを損なわせてしまっているように思われる。ただし，具体的な行為に着目するサルトルの記述は，真理開示に関し，ハイデッガーとは異なった次のような側面をも我々に示してくれる。

真理は，実際に私の身体へと現われ，体感されるのであった。体感されるその瞬間に真理は生成されるのであり，「真理は，〔既に〕生成されたもの(devenu)ではない」(VE, p.35)。そうではなく，サルトルにおいて，「真理とは，生成しつつあるもの(devenant)である」(VE, p.35)，とされる。したがって，ハイデッガーにおいてと同様，「その生成が終わってしまうと，真理は死んでしまう」(VE, p.35)，とされるのである。

一旦生成されてしまい，それゆえ現に体感されなくなってしまった真理は，そのままでは，もはや本来の意味での真理とは呼べなくなってしまう。したがって，或る真理が真理であり続けるためには，再び，体感されるという仕方で，その存在が暴露され続けなければならない。このためになされる手続きを，サルトルは，真理の「検証(vérification)」と呼ぶ。この真理検証という捉え方こそ，サルトルの真理論が我々の具体的生を解明するうえでの重要な手がかりを与えてくれることになる。

まず確認しておきたいことは，真理の検証は，真理を論拠づけたり実験によって確認することではない，ということである。そうではなく，真理を検証することとは，やはり具体的に行動することであり，しかも，「その対象を私の目的のために用いること」(VE, p.55)である，とサルトルはいう。そしてサルトルは，文学作品に関する真理の検証に関しても，以下のように，その具体的行為を記述する。

或る文学作品が文学作品としての存在を暴露され検証されるのは，当の文学作品において記述されている，あるいはそれを介して暗黙のうちに示されている事柄が読者によって読まれる，という行為においてのみである。読者がその本を読んでいるそのさなかにおいて，当の作品の内容や作品に込められている事柄は初めて存在することになり，読むという読者の行為は，その文学作品に，作品としての存在を創造し，付与することになる。すなわち，作家によって暴露された作品の内容に関する真理が作品を介して開示されるためには，「読書と呼ばれる具体的な行為が必要である」(QL, p.48)。しかもその開示は，「読書が続きうる限りでしか続かない」(QL, p.48)。文学における真理の開示と検証とは，読者が読書をし続けているその限りにおいてのみ，なされていることになるのである。

文学作品の真理開示に関するサルトルのこうした記述によって，読者という，作家にとっての他者が，この真理検証では不可欠となることが示されている。そして，IIのAにおいて予示しておいたように，具体的行為による真理検証が前提としなければならない他者の存在こそ，サルトルにおける真理検証が，ハイデッガーの真理観によっては捉えられていない射程を備えていることを明らかにしている。

C 真理と他者

文学作品における作家の場合に典型的となるように，真理の開示は，それを引き受け検証してくれる他者の存在を必要とする。サルトルはこのことを，「真理は，唯一絶対主観に対して〔のみ〕存在する術を備えていない」(VE, p.21)，と述べる。というのも，「私〔だけしか

いない〕なら」，例えば「私は見る」だけで十分なのであり，その存在を「判断する必要はない」(VE, p.23)からである。ところが，例えばこのテーブルが円いと私が判断するならば，「私はただ，他人のためだけに〔そのように判断する〕のである」(VE, p.23)。それゆえ，判断といった行為による真理の開示と検証とは，「間個人的な(interindividuel)現象である」(VE, p.23)，ということが導かれる。

サルトルによって解明されているこうした真理検証は，とりわけ，他者との関わりの場である教育実践における，教師といった立場にある者の，子どもに対する働きかけの意味を明らかにしてくれる。教師は，例えば教材に関し，かつて，ハイデッガーやサルトルのいう意味で，真理を開示したはずである。しかし，教師である以上，繰り返し何度も同じ教材に接し，その教材を，自分にとって慣れ親しまれたものとしておかなければならない。すなわち教師は，かつて自らの開示した真理を，死んだ真理としないわけにはいかない。ところが教師は，授業において，時には，自らの真理を子どもたちに対し開示するためにまず，再び自ら真理を開示して伝達し，検証することを迫られる。こうした場合には，開示と伝達行為を通して，教師は，一旦は死んだものとなってしまった自らの真理を生きている真理とすることになるのである。

しかも，真理の開示が間個人的であるということは，私によって暴露されたものは，他人のために見ることによって，「揺るぎないものになる」(VE, p.23)可能性を根源的に内在している，ということである。他者の真理を伝達された私にとっては，真理が伝達されるだけでは，その真理はいまだ他人の真理でしかない。しかしながら，伝達された他人の真理を受け止めた「私が，新たな暴露の方へと向かって，この即自〔＝他の人にとっての真理〕を超出することにおいて，私はそれを，この対自(pour-soi〔＝私自身にとっての真理〕)として回復する」(VE, p.23)ことになる。例えば，或る事柄を子どもたちに開示した瞬間に，その事柄に関するそれまでの確からしさが教師から失われてしまったとしても，子どもたちが大きく頷いたり納得した表情を浮かべることによって，当の事柄の確からしさは，子どもたち自身にとっての真理として回復される。つまり，この時に子どもたちは，教師にとっての真理を，揺るぎないものとしてくれることになるのである。

それどころか，たとえ実際には他者によって他者自身の真理として回復されないとしても，真理を開示する者が，他者の目を通して自分の真理を再び検証し直すことも可能である。例えば，読者を前提とする文学作品においては，たとえいまだ読者の目に作品が曝されていない時であっても，読者である「他人の〔下す〕評価の観点を介して自分の著作を読み返すことによって，〔作家である〕私は，そこに，自分では彫り込むことのできなかった深みを自分自身のために発見することになる」(CM, p.135)。それゆえ，いつか自分の真理開示を検証してくれるはずの他者が前提されているということだけでもって，私の暴露した「対象は，主観的なものという〔私自身に限定された〕形で存在する」(VE, p.21)，という限定を超えて，自分の開示した真理を，豊かで深みのあるものとされうるのである。同様に，例えば授業の準備をする教師は，教材についての自らの捉え方を掘り下げようとする。しかし，一通りの準備を経た後で，教師が教材についての子どもたちの捉え方を介して教材を再び捉え直すならば，教師の教材解釈は，教師一人では不可能であった次元にまで深められる。教師が子どもの存在そのものによって深められ支えられることが求められる，といった教育界ではしばしばみられる表現でもって想定されていることは，教師のこうした在り方において典型的となる，といえる。

しかも，実際の教育現場においては，次のような事態さえ生じうる。サルトルが解明しているように，読書において，読者は，自分の自由でもって作品を創造する以上，いかなる真理へと導かれるのかも，自分で創造するしかない。それゆえ，読者が読者なりの仕方で真理として創造するものは，「実際，作家によって目指された目的であるが，少なくとも，彼はそれを決して認識してはいなかった」(QL, p.51)ことになる。同様に，例えば文学教材に関して，実際の授業の中での，教師と子どもとの生き生きとした相互の真理開示によって，その作家が自分で捉えていた以上のことが発見されることもあるであろう。

D　リスクとしての真理

しかしながら，具体的行為によって，存在者が自らの身体にとって現われるものこそ真理であることは，真理開示の以下のような側面をも指し示す。すなわち，存在の暴露によって，私は当の存在者から何らかの事態を蒙らざるをえない，という側面である。例えば，白い粉末の塩としての味覚が私に開示されるのは，私が白い粉末を味わった時でしかない限り，私は，白い粉末の味覚についての真理の開示において，しょっぱ

いという味わいを蒙る。ところが，この例示においてサルトルも指摘するように，その白い粉末は，実は砂糖であるかもしれない。私は，実際に白い粉末を味わわなければこの粉末の存在を現われさせることができない以上，しょっぱい味覚を期待していたにもかかわらず甘い味覚を体験するかもしれないという危険と共に，この真理を開示しなければならないことになる。というのも，サルトルにおいては，真理が開示される時に生じている具体的な「現実とは，存在を照らし出して明らかにする者が，その存在によって，破壊され（または強められ，あるいは満たされ）うる，ということである」(VE, p.27)，とされるからである。

この記述からも典型的に明らかとなるように，サルトルは，検証において引き受けなければならない危険こそ，真理検証の重要な側面である，とみなす。ただし，白い粉末の味を検証する際に背負う，砂糖であるかもしれないという危険は，可能性としては否定できないものの，危険と呼ぶほどの事態ではないであろう。それゆえ，サルトルが挙げる卑近な例に即すだけでは，真理検証には危険が伴う，とみなすことは難しい。むしろ，「あらゆる真理は，危険や努力やリスクとして生きられる」(VE, p.27)，というサルトルの記述は，以下のような事態において初めて意味をもちうるはずである。

例えば，誠実な教師は，自らの教材解釈を徹底して深め，授業に臨むであろう。先に述べたように，教材に関し，時には，子どもたちによって教材の作り手の認識以上のものが発見されることもある。しかしながら，子どもたちが，授業内容に退屈しているような表情を浮かべていたり，教師の話をほとんど理解できないような様子を示すこともあるであろう。こうした時に，子どもと真に対峙しようとすればするほど，教師は，自分の真理開示が，子どもたちをそうあらしめてしまうものでしかないことを痛感することになる。それどころか，感受性の豊かな教師は，こうした時にこそ，子どもたちによって，自分の教材解釈の浅薄さを鋭く見抜かれてしまっている，とさえ感じることになる。というのも，この時の教師は，「生き生きした他の〔=子どもたちによる〕真理体系への取り入れからは追放されている」のであり，この真理開示が「どのような意味作用の極を生成するのかを，〔つまり〕他人がそれをどうするのかを知らない」(VE, p.116) からである。こうした時に典型的となるように，「私の真理は，他人の自由によって限界づけられている」(VE, p.117) のであり，時に教師は，教師としての教材解釈能力を自ら問わざるをえなくなるほどのリスクに曝されることにさえなるのである。

E　真理開示における責任

以上のように，サルトルの真理観を解釈し直すことにより，サルトルの真理観に即すことによっても，厳しい真理開示が行なわれている時の体験が，明らかにされることになる。真理開示がリスクを伴うのは，真理が，他者によって限界づけられているがゆえだけではない。我々は，自分が選んだのではない偶然的出来事にしばしば遭遇せざるをえないのであり，この偶然によっても，真理検証はリスクを伴うことになる。というのも，我々の検証の結果は，偶然的な出来事に左右されるために，すなわち，いわば，「偶然が検証の主人となる」ために，検証の「結果」は，「私たちの投企の外でもたらされる」(VE, p.67) しかないからである。真理検証は，開示する者の遭遇する偶然的出来事によって，全く望んでいなかった結果に終わるリスクを常に備えているのである。

しかしまたそうであるからこそ，真理を開示する者は，自らの開示に責任を負わねばならないことになる。すなわち，「自由な人間存在は，真理に面する際に必然的に伴う自己の責任を引き受けるべきなのである」(VE, p.41)。例えば私は，車に轢かれないよう気をつけて道路を歩いていたとする。この時私は気をつけることを通して，道路の安全性についての真理を暴露している。しかし数分後，突然，車が歩道に乗り上げて私を轢き，結果として私は脚を失うことになった，とする。この偶然的な出来事は，私をして，「私の意識が創造したのではないものを存在させる」(VE, p.89)。にもかかわらず，私は，脚を失ったこの私として生きていくしかないのであり，脚を失った自分が，これからどのように振舞うのかは，全て私自身に委ねられている。それゆえ，私は，自ら望んだのではないこの障碍を自分のものとして，何らかの仕方で引き受けざるをえない。すなわち，私は，「私が創造したのではないこの障碍を引き受けること」(VE, p.89) から，自らの真理開示を再び始めるのでなければならない。我々は，偶然的な出来事によってもたらされた事態の「責任をとるという容認し難い必然性」(VE, p.89) を背負わなければならないのである。

偶然的な出来事に対して開示者が負わねばならない責任は，自らの真理開示を子どもといった他者によっていかに検証されるかわからないままに真理を開示し

なければならない教師の，在るべき姿を明らかにしてくれる。教師は，他者によっても，また世界内の偶然的な出来事によっても，自らの真理開示を否定的に検証される可能性を常に携えている。にもかかわらず，そうした可能性を覚悟したうえで，真理開示のリスクへと自己を晒し，真理を開示し続けることは，教師に本来求められる理想的な在り方である，といえよう。

実際，こうした厳しさの中で，教師が，自らのリスクと闘いながらも真理が子どもたちへと開示し続けるような教育実践もあるはずである。こうした教育実践において，教師は時に，「〔その開示へと己の命を懸けつつ，その開示へと己の命を巻き込むという仕方で〕，当の開示へと自らの生を拘束させる(engager sa vie sur la révélation)」(VE, p.35)，という在り方において，子どもたちへと関わっていることにさえなりうるのである。

おわりに

以上で考察してきたように，存在者が隠れなきものとしてあるがままに現われることこそ真理である，というハイデッガーの真理観は，受動的な仕方で新たな存在者と出会う際の子どもたちの驚きと実感を伴う体験を明らかにするうえで重要な手がかりとなる。また，ハイデッガーのこの真理論は，サルトルによって継承され，展開されている。このことは，サルトル自身が，『真理と存在』に，次のようにメモ書きしていることからも明らかである。すなわち，「ハイデッガーが述べるところの，存在をそれがあるままに存在させる態度」は，「出発点」である(VE, p.18)，と。そのうえでサルトルは，ハイデッガーの真理論と自らの真理論との相違を，「真理＝受動性」と「真理＝能動性」(VE, p.18)，という言葉で自ら端的に示す。

このメモ書きによってのみならず，Ⅱにおける考察からも明らかなように，何ものにも囚われることなく落ち着いて現を開き，存在者の現われへと自らを晒している，というハイデッガーにおける真理開示の受動性をサルトルは否定する。すなわち，サルトルは，自ら能動的に存在を暴露するという在り方こそ，真理開示である，とみなすのである。

本稿で考察してきたことによると，確かに，ハイデッガーの真理論を継承しつつも，サルトルは，ハイデッガーによって捉えられていた真理開示の厳密さを十分考慮に入れていない，といわざるをえない。それゆえ，真理開示の多様さが，開示者の体験の本質的な違いを生み出すことを捉えられないままに，卑近な例から稀有な例まで，あらゆる行為を，あらゆる事態を，真理開示として捉えるしかなくなってしまう。このことにより，真理の本来の意味は損なわれかねない。

しかしながら，サルトルの真理論は，自ら能動的に真理を開示しようとする人間の在り方を捉えるうえで，重要な示唆を与えてくれる。とりわけ，立場上，自ら能動的に子どもたちへと関わり，自らの真理を開示することが求められる教師がなしている真理開示の内実は，サルトルの真理観に即すことによって，その多くを明らかにされる。また，真理開示を能動的行為と捉えるがゆえに，サルトルにおいては，ハイデッガーの真理論においてはみられない，他者の問題が取り入れられることになる。このことによって，真理を開示する者の責任といった点にまで，サルトルの真理解明の射程は広げられることになる。

他方，ハイデッガーにおいて，真理の開示は，現存在が存在者の現われへと自己を開き曝すことによって，受動的な仕方でしか生じえない。こうした真理観は，例えば，教師の話に聴き入り，存在の現われへと受動的に身を委ねている子どもたちにおける真理開示の体験を考察するうえで，非常に重要な手がかりとなることは間違いない。確かに，現存在が，何ものにも囚われることなく自己を曝すといった在り方となることは，非常に稀有である，といわざるをえない。そうである以上，ハイデッガーのいうところの真理開示は，非常に厳しい条件下でしか行なわれえないであろう。しかしそうであるからこそ，ハイデッガーのいうところの真理が，授業において実際に開示されたならば，その開示は非常に豊かなものとなっていることもまた，明らかとなるのである。

(指導教員　中田基昭教授)

注

1)本稿では，ハイデッガーとサルトルの著作からの引用に際しては，引用文献に示す略号でもって，引用している著作を示すことにする。

2)この Unverborgenheit というドイツ語は，相良によれば，「隠す，秘密にする」(『Grosses deutsch-japanisches Wörterbuch』)，を意味する verbergen という動詞の過去分詞 verborgen に否定の un を冠した形容詞の名詞形である。したがって，この語は，ハイデッガーの指摘するところのアレーテイアという語の成り立ちに相当しているのであり，アレーテイアのドイツ語訳としてふさわしい，といえることになる。

3)ここで暴露と邦訳されているフランス語の dévoilement は voile(＝

ヴェール)と dé(=取り外すこと)という言葉から成り立っている。したがって，注2)で述べたドイツ語の Unverborgenheit と同一の構造が，フランス語においても見られる。

引用文献(〔 〕内は本稿における略記号)

Heidegger, M. "Vom Wesen der Wahrheit" Vittorio Klostermann, 1954 〔WW〕

Heidegger, M. "Platons Lehre von der Wahrheit" Francke Verlag, 1975 〔PW〕

Heidegger,M. "Einführung in die Metaphysik" Vittorio Klostermann, 1983 〔EM〕

Sartre, J. P. "Qu'est-ce que la littérature ?" Gallimard, 1948 〔QL〕

Sartre, J. P. "Cahiers pour une morale" Gallimard, 1983 〔CM〕

Sartre, J. P. "Vérité et existence" Gallimard, 1989 〔VE〕